

オレオレ

ヨコテ

今日もついていなかった。

このところいつもそうだ。さっぱり玉が出ない。

空になった受け皿を恨めしそうに眺め、安川信治は溜め息を吐いた。旨いものを食う目論見がオジャンになったところか、注ぎ込みすぎてしまったために今月の残りはギリギリの生活が続くことになる。パチンコをやめられればいいのだが、パチンコに興じている間だけが我が身の不遇を忘れられる時間だった。

予定外の出費が出来たと、親に泣きつこうかと信治は考えた。言えば送ってくれるだろう。だが、すでに仕送りを受けている身としては言い出しづらかった。以前にも騙して金を送ってもらったことがある。ギャンブルでこしらえた借金を返済するために、二度、三度と嘘を吐いた、病気になったと盗まれたとか——。さすがにこれ以上の嘘は吐きたくなかった。

三十を前にして勤めていた印刷会社が倒産し、信治は今、三度目のハローワーク通いをしている。運転免許以外に履歴書に書き込める資格は何もなく、次の仕事はなかなか見つからなかった。その苛々も信治をパチンコへと駆り立てたが、勝てる日はそう多くなく、苛々はさらに募った。

「お兄さん、あまり出なかったようだね」

隣の台の男が親しげに話し掛けてきた。最近よく顔を合わせる、信治よりも十歳くらい年上の男で、今日もビシッとしたスーツを着込んでいる。一見すると普通のサラリーマンのように見えるが、何をやっているのか、信治は知らなかった。

「駄目でしたね。最初は調子よかったですけど、結局スッカラカンですよ」と、自嘲して言う。

「しけた顔をしてないで、これでもう少し頑張ってみなよ」

隣の男はニッコリと微笑み、自分の出玉を両手で掬うと、信治の台に移した。

「悪いですよ」と、困惑の顔で言いつつ、内心では儲かったと信治はほくそ笑んだ。

「いって、いって。俺は出ているんだから」

見ると、男の足元にはドル箱が五段積み重ねられている。

「それじゃ、遠慮なく」

再び打ち始めた信治に、男が話を続けた。

「昼間から打ってるけど……お兄さん、仕事は？ 今日休み？」

「いいえ。恥ずかしながら無職です。会社が倒産してしまいました」

「倒産……そりゃ大変だ。パチンコなんかやって大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないですよ。でも、飯は食わなくてもいいけどパチンコはやめられません」

信治の言葉に、男が苦笑いを浮かべる。

この男も同類なんだと、横目に見ながら信治は思った。

一見すると普通のサラリーマンだが、本当は無職で、内緒にしている家族の手前、毎朝スーツを着て出掛けているのかもしれない。

さっきまでと違って出玉の調子はよかった。もしかしたら今日の負け分を取り返せそうだ。

自然と押し黙ってしまった信治に、隣の男がまた話し掛けてきた。

独り者かとか、出身地は何処かとか、信治のことを訊きたがり、その程度のことには答えたが、あとは曖昧に言葉を濁した。言いたくなかったのではなく、信治の意識はパチンコの出玉にあった。男も信治のプライベートに立ち入りすぎたと思ったのか、それから話を訊いてくることはなかった。

ふたりの会話は途切れ、パチンコ店内の喧噪だけが信治の耳には届いていた。

調子のよかった出玉は少しずつ減り始め、ついにまたなくなってしまった。

信治は思わず舌打ちをした。

「ああ、やっぱり駄目でしたよ、せっかく譲ってもらったのに……」

「それは残念だったな。よかったらもう少しどうだ？」

信治が何も言わないうちに、さっきと同じようにして男は出玉を信治の台に移した。男のドル箱はさらにふたつ増えている。

戸惑いを覚えながらも、信治は恐縮して礼を言った。感謝よりも、何て物好きな男なんだろうと、奇異に思う気持ちが先に立った。

今度はあっという間だった。心の中で何度も、入れ！ と念じたが、あたりは一度も来なかった。虚しくハンドルから手を離すと、隣の男が顔を向けた。

「どうやら少なすぎたようだな」

ケチケチした自分が悪かったとでも言うように、男がドル箱ごと信治に渡そうとする。

「いえいえ、それは……」

さすがにドル箱ごと受け取るわけにはいかなかった。たとえ友人であったとしても憚れるし、ましてや隣に座っただけの男にすぎない。

尚も「遠慮しないで」と言う隣の男が、信治は面倒臭くなってきた。そんなに親切にしてもらう道理がないし、親切を押し売りされているようで鬱陶しくなってきた。

「本当に結構です。もう帰りますから……。玉、ありがとうございました」

「本当に帰るのか？」

ハンドルから手を離し、男が信治をジロリと見た。厭な目つきだった。

「ここにいても仕方ありませんので……」

「それじゃ、ちょっと待っててくれ」

男が慌てて店員を呼び、出玉の精算をする。

信治はパチンコ店の出入り口に立ち、男が外の換金所から戻ってくるのを所在なげに待った。帰ってもよかった。待つ義理はない。玉を譲ってくれたのは向こうが勝手にやったことだ、と思ったが、それでも心情的に、このまま姿をくらませてしまうのは心苦しかった。今度顔を合わせた際に気まずい思いをするのも厭だった。

やがて男がホクホクの顔で戻ってきた。そこにはさっきの厭な目つきの面影はなかった。

「待たせたね。ところでお兄さん、時間ある？」

「あるといえばありますが……」

無下に断るのは悪い気がして、ことさらあやふやな態度を示せばこちらの意図を察してくれるものと期待したが、男には通じなかった。

「よかった。ちょっと呑みに行かないか？ 俺ばかり稼がせてもらったからな、俺が奢るよ」

さあさあ、と男が促す。断りそびれた信治はついて行くしかなかった。それに、奢ってくれるのなら断ることもないだろうと思った。男の後ろ姿が誰かと話したがっているように見えた。信治にも時々そんな日がある。只飯は食えるし、話し相手になるくらいならいいか——。

近くの居酒屋に入る。まだ早い時間で、店内は空いていた。六つのテーブルとカウンター席があり、ふたりは一番奥のテーブルに案内された。

男が適当にビールと料理を注文する。何か食べたいものは？ と訊かれたが、信治は何も頼まなかった。男の頼んだ料理で充分だったし、奢りと聞いて遠慮なく注文するほどこの男に対して心を開いた訳でもなかった。

それまでお互いの名前を知らなかったふたりは名乗りあった。男の名前は黒津といった。名前など知る必要も言う必要もなかったが、今度パチンコ店で顔を合わせた際に、お兄さん、と呼び掛けられないで済むのはありがたかった。

ビールが運ばれ、次々と注文の料理がテーブルに並ぶ。

意味のない雑談が続き、それが一段落すると男は店員の動静を気にしながら少し声を低くした。

「安川さん、今日誘ったのはね、実は……」と、何か思惑があったのを匂わせた。ただ誰かと話をしたかった訳ではないらしい。

「俺のところで仕事をしないか？ 手伝ってもらいたいんだ。仕事を探してるんだろ？」

「探してはいますが……」

まさに渡りに船だと思った。これといってやりたいことのない信治には、向こうから話が舞い込んできて願ってもないことだった。だが、同時に小さな不安を持った。黒津と名乗ったこの男をよく知らない。パチンコ店で時々顔を合わせる程度で、長く話をしたのも今日が初めてだった。それに、信治のことは知りたがったくせに自分の話はせず、この男は何処か秘密めいていた。

「それなら決まりだ。なあに、簡単な仕事だから心配しなくてもいい」

信治が断らないと踏んでいるらしく、口元に笑みを浮かべ、ビールを勧める。

足元を見られているようで、信治はちょっと癢だった。

「簡単な仕事と言われましても……どういった仕事なんです？」

「電話を使ってだな、いろいろ話をする仕事だ」

「というと、アンケート調査のようなものですか？」

「まあ、そうだな、そんなようなものだ」

曖昧な言い方で誤魔化しているように感じられたが、金に余裕のない信治は興味を持った。電話で知らない人と話をするのは得意ではなかったが、それほど不得手でもない。仕事となれば頑張れるだろう。

「簡単なら僕にも出来そうですね」

「ああ。決められたとおりに話せばいいだけだし、安川君は頭がよさそうだから、二、三回でコツが掴めるだろう」

自尊心をくすぐられ、信治の心は仕事をやる方へ大きく傾いた。失業保険が切れれば生活は困窮する。仕送りだけではパチンコもままならない。すぐに返事をしてもよかったが、肝心のことをまだ訊いていなかった。金は欲しいが安い賃金で働かされてはかなわない。

「それで……給料はどのくらいでしょうか？」

信治が単刀直入に訊くと、黒津の小鼻がピクリと動いた。

「小さな会社だが、普通のサラリーマンよりは多い。やればやっただけの金が手に入る」

年収で五百万から七百万くらいだろうか。それならいいことはない。ただ、歩合制らしいのが気になった。やればやっただけ——これまで歩合制の仕事はしたことがなく、何となくノルマに追われるイメージがある。ノルマを達成しなければ真面に給料を払ってくれない企業もあると聞く。

「歩合制ということですか？」と信治は確認した。

「まあ、そういうことだ。歩合制といっても会社全体が一つのチームになっているから、いわば全体責任みたいなものだ。みんなで稼いでみんなで分ける。稼ぎは仕事次第だが、一回の仕事でひとり当たり十万や二十万を稼げることもあるし、運がよければ百万のときだってある」

誇らしげに、にんまりとして黒津が言う。

一回の仕事で百万——いかにも怪しい。

よく知りもしない自分に、一回で百万もくれる会社があるはずがない。それに月給ではなく、一回当たりの仕事で賃金を払うというのは普通じゃない。考えてみれば、パチンコ店で声を掛けてきたのも妙だ。

信治は胡散臭さを感じた。が、それでも百万という魅力は棄てがたかった。

「本当に百万ももらえるんですか？ あまりにも高額なんで信じられなくて」

「まあ、毎回百万という訳にはいかないが、しかし、それに近い数字は不可能じゃない。現に先々月だったかな、百万を超した日が三回もあった。だからやる気と運があればいくらでも稼げる。どうだ、やってみないか？」

黒津が上目遣いに言った。押しの強い言い方で、暗に、やらないやつは馬鹿だと言っている。

「はあ……」

信治は迷った。先々月は三百万以上をもらえたことになる。今の自分にとって悪くない話、願ってもない話だ。だが——仕事を選ぶつもりはないが、何をやるかが懸念される。

「正直、お金に困っていますからね、やりたいのは山々なんですけど……」

「それなら話は決まりだ。何か問題でも？」

「仕事の内容を詳しく教えて欲しいんです。報酬があまりに高額なものですから、ひょっとして危険な仕事かと思ひまして……」

「危険なんて何もないよ、電話を掛けるだけだから。まあ、詳しい話は事務所で……」

黒津はここで仕事の詳しい内容を言うつもりはないらしい。言えないと言うことは、おそらく法律に触れるか、反社会的な仕事なのだろう。

「まさかヤクザがらみの仕事ってことはないですよ？」と声を潜めて信治は訊いた。

胡散臭さを感じていたので法律すれすれの仕事なのは覚悟したが、ヤクザと関わり合いになる覚悟までは持てなかった。

信治の問いに、黒津は鼻を鳴らした。

「それは考えすぎだ。が、綺麗な仕事でないのは確かだ。察してるよな？ だが、それに値するだけの報酬は保証しよう。悩むのは分かる。一晩悩んで結論を出してくれ。俺も暇じゃないんでね、安川君が駄目なら次を探さなくちゃならない。それじゃ、俺はこれで」

数枚の万札と携帯の番号が書かれたメモを置き、黒津は席を立った。

渡されたメモをじっと見る。

真面な仕事でない以上、関わらない方がいいのは分かっている。だが、信治は旨い話が逃げていく気がした。決断しなければ、誰かが自分の代わりに旨い汁を吸うことになる。三十近くになっても親の脛を嚙っている自分が厭で、とにかく金が欲しかった。

にんまりとして言った黒津の言葉が思い出される。

運がよければ一回の仕事で百万――。

翌朝、信治は微かに迷いを抱きつつも、黒津の携帯に電話した。黒津の声は淡々としていた。待ち合わせの場所の駅を告げただけで、黒津は事務所の場所を教えてくれなかった。用心しているのだろう。

午前十一時。指定された駅に着く。

久々にスーツを着た信治は複雑な気分だった。

目の前を多くのサラリーマンが急ぎ足で通り過ぎていく。彼らの中に入ることはもうないのかもしれない。もう真面には生きていけないのかもしれない——そう思うと、一抹の寂しさを感じた。

「あなたが安川さん？」と、若い男が声を掛けてきた。知らない顔だった。細い目で辺りを探るように見渡している。

「ええ」と信治が訝しがっていると、男は「社長の代わりに来ました。こっちです」と言った。

この男も社長の黒津と同じように、高級そうなスーツを着ていた。儲かっているのは嘘ではないらしい。

覚悟を決めて案内役の若い男について行き、いくつかの路地を曲がると、老朽化した雑居ビルに着いた。この上だ、と男が指し示す。階段を上り、薄汚れた扉の前で男は立ち止まった。信治の鼓動は急に激しくなった。扉の向こうの、真面ではない世界にあまりに安易に来てしまった気がして覚悟が揺らいだ。

案内役の若い男に急かされ、信治は別世界に足を踏み入れた。

事務所は窓が小さくて薄暗く、天井も低くてお世辞にも大金が稼げる場所には見えなかった。折りたたみの細長いデスクと一台のノートパソコン、無造作に置かれた数台の携帯電話、備品といえるものはそれだけだった。中には案内役とは別の、ラフな格好をしたもうひとりの若い男がいた。社長の黒津を入れて三人。信治を加えれば計四人。それが社員の全てのようなようだった。

信治が事務所の様子を見ていると、電話中だった黒津が信治に気づき、携帯を耳から離した。

「やっぱり来てくれたな」

ひと言言うと、黒津はすぐに携帯を耳に戻した。携帯での話を続けながら信治に向かい、椅子に座っているように指示する。

遠慮がちに椅子に座り、信治は黒津の電話が終わるのを待った。

駅から信治を案内した若い男は、いつの間にかパソコンのキーを叩いていた。もうひとりの男は窓の外を眺めていた。高級スーツのふたりに較べるといかにもフリーターのように、頼りなさそうに見える。

電話を終え、黒津が信治の元にやってきた。

「そんなに畏まらなくてもいいんだぞ。先日ひとり辞めてね、代わりを探していたんだ。まあ、君ならやってくれるだろうと思って声を掛けてみたんだが、決心してくれて感謝するよ。ごらんのとおり、会社とは言えないが……」

信治は黒津が話すのを黙って聞いていた。

会社は一応の表向きとして、企業に依頼されて新商品のモニタリングを行っていることになっていた。しかし、実態は犯罪に手を染めている詐欺集団で、“オレオレ詐欺”をやっていた。オレオレ詐欺と聞いても信治はさして驚かなかった。それよりも、そんなものが今でも通用するのだろうか、そちらの方に驚いた。ニュースではほとんど聞かなくなったし、振り込め詐欺で聞くのは、税金や年金の還付金と偽って相手から金を騙し取るのが主流だ。だが、意外に今でも“オレオレ”で騙される人は結構多いらしい。

黒津たちがこの事務所に移ってきたのは二日前ということだった。辞めていった男との間でトラブルがあったようで、報復で警察への密告を恐れての移転だったらしい。教えてはくれなかったが、辞めていった理由が一身上の都合で——ということはないさそうだ。

「分からないことがあったらここにいる梶山と西尾に訊いてくれ」と黒津が言うと、ふたりの若い男はちょこんと頭を下げた。向き合ってちゃんと見ると、ふたりとも二十歳そこそこに見える。

信治を案内した方が梶山で、よろしくとにこやかな顔をした。対照的に、もうひとりの西尾という男は大人しそうで地味だった。挨拶が済むとまた窓の外に目を向けている。口先で人を騙せるようには見えないが、案外見掛けによらないのかもしれない。

梶山によると、黒津たちの手口は闇雲に電話を掛けるのではなく、インターネットで売買されている各種の名簿を元にリストを作り、実際の息子になりきるといったものだった。息子役が事故を起こして示談金が必要だと告げ、弁護士役が登場して示談金の交渉をする——ありふれた手口だが、息子が実際に名乗って金の催促をするのだから以前に較べ、成功率は格段に高くなっらしい。「効率よくやれば、それだけ成功率は上がる」というのが黒津の口癖で、それは真実だと梶山は言った。それでも、声質や口調で怪しまれる確率の方が圧倒的に高いのは否めないらしい。そんな相手を信用させるのもこの仕事の醍醐味だ、と梶山はうそぶいた。

黒津が新しい携帯の調達をするために事務所を出て行った。生命線である携帯は頻繁に交換する必要があり、黒津はそういった機器の調達、携帯の契約に必要な偽造免許証の入手、銀行口座の開設などを担当していた。残りの者が名簿からのリスト作成や実際に電話を掛けて金を手に入れ、入金データの管理を行うことになっている。

梶山がリストの見方を説明してくれた。

リストには家族構成と電話番号が書かれていた。息子の名前は太字で記され、年齢が書かれたリストもあったが、大半には記載されていなかった。親の名前がないものもいくつかあった。

「ちょっと前だけど、オレオレって話を始めたら、一発でバレたことがあったよ」

どうしてだと思う？ と、梶原が謎を掛けるように信治を見る。信治が首を傾げると、梶原は得意げな笑みを零した。そのときの失敗がよほど面白かったらしい。

「小学生だったんだよ、息子は。声変わり前だったからすぐにバレてしまった」

バレて当然だ。いくら息子の名前が分かっている、歳が違いすぎては引っかかるはずがない

。

「どうやって誤魔化したんです？」

「どうやっても何も……誤魔化しようがないから、クソババア！ って言ってやったよ」

梶原がケタケタと思い出し笑いをする。

「まあ、疑われていると感じたらすぐに電話を切ることだ。携帯の番号から足がつくことはまずないが、用心に越したことはないからな。“用心一秒、安心一生”、これも社長の口癖だが、こっちはあまり巧くないな」

窓の外を見ていた西尾が、おもむろに肩から黒い鞆を提げて席を立った。いつの間にか黒縁のメガネとマスクをしている。

「西尾さんが引き出し役なんですか？」

「そう、出し子だ。こっちで話が上手く行って、お客が金を振り込んだらすぐに出し子の西尾が引き出すことになっているんだ。まあ、いずれ分かることだろうから言っておくけど、西尾は社長の甥っ子なんだよ。死んだお姉さんの息子。離婚していたから西尾はひとりぼっちになってしまって、憐れに思った社長が救いの手を差し伸べたって訳。だけど……こっちの仕事では使い物にならなくて、仕方なく出し子と社長の手伝いをやっている。まあ、特別待遇ってやつだな」

西尾が育った家庭環境は、恵まれていたとは言い難い。そして、梶原は西尾を快く思っていないようだ。出し子が特別待遇ということはないだろうから、社長の手伝いが出来るのをやっかんでいるのだろう。

「梶原さんはどうしてここに？」

知りたかったわけではないが、コミュニケーションの一環として信治は訊いた。

「俺か？ 俺もあんたと同じだよ。俺の場合、パチンコじゃなくて競馬だったがな。ギャンブルが社長の趣味なんだよ。ときどきパチンコや競馬に行って仲間に入れても大丈夫そうなやつを物色しているんだ。社長はじっくり観察してからでないとは動かないからね、幸か不幸か、社長のお眼鏡にかなって、今じゃ立派な詐欺師だよ」と、梶原が自嘲気味に笑う。

「俺も社長のお眼鏡にかなった訳ですね」

冗談を言ったつもりだったが通じなかったようで、梶山は真顔になっていた。

「この仕事、本当にやるの？」とあけすけに訊く。

やる気があるかどうかの最終面接——「ええ」と、ためらいながらも信治は答えた。

「そうか。それじゃ仕事に掛かるうか」

これで詐欺集団の一味になってしまった。後悔はなかった。引き返すつもりもなかった。ただ若干、罪を犯すことへの後ろ暗さはあった。何処かでまだ他人事のような気がしていた。

仕事は上手くいく日もあれば全く駄目な日もあった。

必然的に、仕事に慣れていない信治が息子役を、梶原が弁護士役をやった。

さすがに最初の客のときは緊張したが、二度、三度と電話を掛けているうちに変な度胸がついた。そして五度目の電話でついに成功した。何の疑いも抱かずに客は五十万を振り込んでくれた。銀行のATMから西尾が戻ってきて、現金を目の前にすると達成感で高揚した。みんなの祝福が嬉しかった。充実感の中で、小さな罪悪感は心の奥底にしまわれた。記念すべき第一回の報酬は八万だった。

「オレオレ……」

ぎこちなかった口調に余裕が生まれ、今では泣き真似さえ出来るようになった。半信半疑だった客もこれをやると大抵は落ちる。もともと嘘を吐くのが上手かった信治は、騙しの電話を掛けているうちに、この仕事が天職のような気がしてきた。梶原のように、怪しんでいる客を信用させて喜ぶような、そんな心境には至ってないが、捕まらないのであればいつまでも続けていいとさえ思った。報酬も取り分は低い、黒津が言っていたように普通のサラリーマンよりもかなりよかった。

そんなある夜、信治の携帯に北海道の母親から電話があった。

懐旧と羞恥。

信治は実の母親にどう対応したらいいものか、戸惑った。電話の声は切実に息子を心配する声だった。少しも疑っていない。

「苦労しているようだけど……仕事は見つかったのかい？」

「まだだよ」

あれを仕事と呼べるのなら見つかったのだが、それは言えない。

「そうかい、大変だねえ」

心配する母の声が耳に痛い。

「大変だけど、何とかやっているよ」

「困っているだろうと思って、いつもどおり送っておいたからね」

仕送りだ。騙して送ってもらっている仕送り。もう必要ない。断ってもよかった。断るべきだと思った。しかし、信治は何も言えなかった。騙していることでしか、今の信治は家族と繋がっていなかった。

「躰に気をつけるんだよ。遠慮しないで、困ったならいつでも言っていいから」

母親はまだ何か話したかったようだったが、信治はぞんざいに電話を切った。真実を知っている、と言われるのが怖かった。本当は気がついているのに、知らないふりをしているだけかもしれないと思うと、居たたまれなかった。

毎回の仕送りはかなり無理をしているはずなのに、恨みがましいことはおくびにも出さず、ただ息子の無事を祈っている——そんな親に何度も嘘を吐いた。

親ばかりではない。三つ下の妹、幸恵にも嘘を吐いてしまった。東京へ呼び寄せ、大学に通わせてやると大見得を切ったのに、それは果たされなかったばかりか、結果的に両親を幸恵に押しつけることになってしまった。農場には数十頭の乳牛がいて、両親だけでは体力的に無理だった。人を雇う余裕はなく、幸恵が男のようになって働いてくれた。そのせいもあってか、けして不細工ではないのに異性との出会いが少ない幸恵は、未だに恋人が出来ないでいる。

信治は実家の酪農の仕事が嫌いだった。きつくて臭くて、何より牛そのものが苦手だった。子供の頃、鼻先で突き飛ばされて泣かされたことがあり、怖くなってしまった。だから人手が足りないというのに実家の手伝いはほとんどしなかった。何だかんだと嘘の用事を作っては逃げた。学校の行事や友達との約束など、簡単にバレてしまう嘘を吐いた。そんな信治が酪農の仕事を継いでくれると思えなかった両親は、高校を出たら東京に行きたいと願う信治を引き留めなかった。本当は継いで欲しかっただろう。それは信治にも分かっていた。だが好きにさせてくれた。信治は東京へ出てきて十年が経つが、その間、一度しか実家に帰っていない。連絡も信治からすることはほとんどなかった。信治からする連絡といえば無心のときだけだった。

俺は嘘を吐いてきた——。

何だかんだと嘘を吐いてきて、挙げ句の果てが詐欺師だ。詐欺師の仲間に入って罪のない人を騙している――。

信治がオレオレ詐欺を始めてから三ヶ月が過ぎた。仕事は相変わらず好不調の波はあったものの、差し迫っての危険はなかった。この日、始めてそれらしい兆候が現れた。

「大輔はまだ来ないのか？」と苛立たしげに、社長の黒津は梶山に訊いた。黒津は甥っ子の西尾を普段、大輔と呼んでいる。

「まだです。そういえばちょっと遅いですね」

「遅刻にしても遅いな。ちょっと電話してみろ」

梶山が電話を掛ける。その首が振られた。

「電源が切られているようですね」

「どういうことだ？ あれほどいざという時のために電源を切るなどっておいたのに。梶山、様子を見に行行って来てくれ」

「ただの寝坊だと思いますけど……社長は西尾に甘いから」と、梶山が面倒臭そうに言う。

「いいからさっさと行って来い」

「分かりましたよ」

梶山は渋々事務所を出て、西尾のアパートに向かった。

そして、梶山が出て行って三十分、黒津の携帯が鳴った。梶山の報告を聞いていた黒津の顔が険しくなる。

「そんなはずはない。おかしい。もう一度呼んでみる」

梶原は何度か呼び掛けたようだ。それでも西尾は起きてこないらしい。

少し間があり、黒津の顔がますます険しくなった。

「何だと？ 分かった。あとで連絡する」

近づきたい雰囲気黒津は醸し出していたが、信治は訊かずにはいられなかった。

「どうだったんですか？」

「もぬけの殻だそう」

「もぬけの殻……。いなくなったんですか？」

「ああ。逃げやがった。大方、この仕事が厭になったんだろう、向いていなかったからな。ちくしょう、さんざん世話してやったというのに、こんな仕打ちをするなんて……。とにかくここを出よう、警察に密告することはないと思うが……」

信治がノートパソコンと数台の携帯をバッグに押し込むと、黒津はそれを信治から奪うようにして手に持った。

「次の事務所が見つかるまで休みだ。パチンコでもしてろ。また電話する」

ふたりは雑居ビルの出入り口で別れた。

辺りを窺いながら黒津が離れていく。大きな鞆を提げて急ぎ足で歩く黒津の姿は不審者そのものだった。この場で警察の職務質問を受けたら一発でアウトだな、と信治は思った。

初めて迎える危険な状況に、信治の心は大きく揺れ動いた。逮捕という事態が現実味を帯びてきて、周りの視線が気になって仕方がなかった。警官を見掛けると、背中を向け、顔を見られないようにしてやり過ごした。

道順を変えてアパートに帰り着き、梶山に電話する。

「梶山さん、西尾さんはどうしちゃったんですか？」

「俺にも分かんないよ。隣の部屋の奴に聞いたんだが、夕べ遅く、夜逃げのようにあっという間に出て行ったそう。隣の奴、俺を悪徳の借金取りとでも思ったのか、ちょっと怖がってたな。まったく、こっちは善良な詐欺師だっていうのに」

クククと梶原が笑う。信治は笑えなかった。

「捕まるのが怖くなったんでしょかねえ……」

「そうかもな。所詮、あいつは腰抜けだったんだよ」

「やっぱり刑事ドラマのように、最後は捕まるんでしょか？」

「そんなにビクビクするな。社長なんか一度も捕まってないんだ。あの人の言うことを聞いていれば大丈夫だって」

「それだったらいいんですが……西尾さんがチクルかもしれませんよ」

「ないとは言えないが……やけにマイナス思考だな。でもな、その覚悟があって事務所に来たんだろう？ もうお前は立派な犯罪者なんだぞ」

“犯罪者”という言葉が信治の頭の中で鳴り響く。

「そうなんですよ、俺は犯罪者なんですよ……」

信治は力なく言った。安易に足を踏み入れてしまった別の世界、そこでは楽に金を稼げたが、失ったものは比較にならないほど大きかった。

「おい、大丈夫か？ お前まで逃げたりするなよ。社長は西尾には甘いがお前は他人だ、どんな目に遭わせられるか。いや、脅かす訳じゃないんだが……」

「俺は大丈夫ですよ。犯罪者になってしまったんだ、やるしかないですよ」

引き返せないことくらい分かっている。犯罪に手を染めてしまった自分を誰が真面に相手にしてくれるものか。

「開き直ったようだな。その意気だ、頼りにしてるぞ。ところで西尾の話だが……」

梶山の口調が急に改まった。

「他にも思い当たることがあるんだ」

「何です？ それは」

「うん……。これはあくまで俺の想像だが……西尾は社長から逃げたかったんじゃないかな」

「世話してもらっておきながら？」

「それだよ。確かに世話になったのは事実だろうが、社長は何かあるとそのことを口にするだろう、恩着せがましく。反発心というか、そんなものが西尾にあったんじゃないかな」

「反発心ですか……。何となく分かる気がしますね」

「いつまでも子供扱いされるのが厭だったのかもしれないな。社長の元を離れて自由になりたかったのかも。あるいは父親面されるのが厭だったのかもしれない。こんなことを俺が言ってたなんて社長には喋るなよ」

「喋りませんよ」

社長が新しい事務所を見つけ、活動が再開されるのは二週間後くらいだろう、と言って梶山は電話を切った。

二週間の休み——信治はふと、北海道へ帰ってみようかと思った。父母の顔が浮かぶ。いくぶん老けたことだろう。晴れ渡った空の下、牧草を食んでいる牛の群れが浮かぶ。その光景は十年前と変わっていないだろう。

——が、すぐにその考えを打ち消した。

信治にも小さな反発心があった。確かにいい歳をして仕送りをもって情けない限りだ。それだけに汚れた金であれ何であれ、成功したとハッキリ示せるものがないうちは帰れなかった。小さな意地であり、信治なりの矜持だった。

二週間後、活動が再開された。

前と同じような雑居ビル。中は前よりも狭かった。

西尾の行方は分からないままだったが、事務所を移転したことで一応の危機は脱したようだった。いなくなった西尾の代わりを入れる話は黒津の口から出なかった。梶原が言うには、社長は西尾が戻ってくるのを待っているらしい。裏切られたとはいえ、肉親は可愛いのだろう。金の引き出しには外回りをしながら黒津が当たることになった。

「オレオレ……」と、せっぱ詰まった口調で話し始める。緊張の一瞬だが、信治はすっかり慣れていた。緊張を愉しんでもいた。

留守だったり、はなから怪しまれたり、この日の成果は芳しくなかった。手応えらしい手応えもなく、このまま一日が終わってしまいそうだと思いながら、信治は次を最後と決めて電話を掛けることにした。

リストに目を通す。

母親、島本静子、五十八歳。

息子、島本義幸、二十九歳。

偶然にも母親と同じ名前、同じ年齢だった。

心に微かな痛みを覚えつつ、信治はリストに書かれた番号に電話した。

「オレオレ……義幸」

咳払いをし、風邪を引いているのを匂わせる。

電話からは何も聞こえてこなかった。バレたのか、と信治は思った。咳がわざとらしすぎたのかもしれない。切ろうとしたとき、反応があった。

「お前から電話してくるなんて珍しいね、どうかしたのかい？」

信治は耳を疑った。聞こえてきた声は母にそっくりだった。

動揺を悟られないように急いで話を続ける。

「事故を起こしてしまって……」

「事故？ ああ、大変」

電話の声が困惑している。それは信治が、病気になったとか金を盗まれたと嘘を吐いたときの、母の反応にそっくりだった。

「それで……示談金が必要なんだ」

「示談金だね。いくら必要なんだい？」

「百万か二百万か、ハッキリしたことは分からない。弁護士さんがいるから代わるよ」

母親にそっくりだった声——奇妙に思いながら、信治は弁護士役の梶原に携帯を渡した。

リストの電話番号を見直す。

確かにこの番号に掛けた、間違いない。世の中にはそっくりな人が三人はいるという。声がそっくりな人がいてもおかしくない。が、それにしても似ていた——。

「もしもし……もしもし」と、梶原が電話に呼び掛けていた。少し苛ついている。

「もしもし……どうのことだ？ 誰も出ないぞ」

信治はリストから目を離し。顰めっ面の梶山を見た。

「おかしいですね。さっきまで話してたんですが……」

「勘づかれたかな」

「そんなはずはないと思いますが……」

「もしもし……もしもし」と、梶山が再び呼び掛ける。

「出ませんか？」

「ああ。切れてはいないが、誰も出ない。どうなってるんだ？」

腹立たしそうに、クソババア、と悪態を吐いて梶山は電話を切った。

梶山から携帯を受け取り、発信履歴を調べると、リストの番号に間違いなかった。無意識のうちに実家の番号を押していたのではなかった。話しをしたのは赤の他人。声はそっくりだったが、母ではなかった。それでも信治の胸中には言いしれぬ罪悪感が残った。

「今日がついていなかったな。最後の電話は妙だったし……。まあ、今日のことは忘れて明日、明日。明日こそはでっかい山が当たりますように」

神社でお参りするように、梶山は携帯に向かって頭を下げ、柏手を打った。それが終わると信治に向かって手首を捻って見せた。

「帰りにちょっとやっていくか？」

仕事は銀行の窓口が閉まる三時頃には終わるようにしていたので、パチンコには十分な時間があった。しかし、信治はそんな気分ではなかった。

「遠慮しときますよ」

「そうか」と言い、梶山はいそいそと事務所を出て行った。

信治はさっきの電話が気になって仕方がなかった。

母親の声にそっくりだった女の人——

こちらの声に何の疑いも持っていなかった——

奇妙な電話のことを考えながら、駅への途中で信治は大きな書店に入った。事務所が移って毎日本屋を目にするようになり、いつか入ってみようと思っていた。

店内は賑わっていた。出入り口付近に最新の本が積まれている。ぐるりと店内を見渡すと、雑誌売り場辺りは入り込む隙がないほど立ち読みでひしめき合っていた。階段を上り、二階に行く。二階は打って変わって人がいなかった。難しい顔をした中年の男が二、三人、棚の前で熱心に本を選んでいる。二階には政治経済や歴史、社会問題を扱った本が置いてあった。

信治は迷わず一冊の本を手を取った。

ちんぷんかんぷんで読みたいとは思わなかった本だが、愛着があった。そっとページをめくり、巻末に書かれた印刷会社を確認する。信治の心は懐かしさでいっぱいになった。

決していい社員ではなかったが、それでも充実した日々が過ごせていた。印刷工場での単純作業——金はなかった。暇もなかった。だが、仕事をする喜びはあった。今の自分はどうか。仕事への喜びどころか、何のために生きているのかさえ分からない。人を騙して金を巻き上げて——少なくとも、こんなことをするために生きているのではないことは分かっている。なのにいったい俺は何をやっているんだろう——。

ふと、斜め後ろに視線を感じた。

警察か？

信治は手にしていた本を棚に戻すと、何食わぬ顔で階段へ向かい、足を速めた。

警察の手が伸びているはずはなく、勘違いだろうと思ったが、用心した。

後ろを気にしながら雑踏の中を駆へと急ぐ。

思い過ぎだったようだ――。

そう思ったのも束の間、駅が見えてきたところで信治は後ろから「安川さん」と声を掛けられた。やはり誰かにつけられていた。一瞬、信治は立ち止まるかどうか躊躇し、歩みが遅くなった。立ち止まったら自分が安川だと認めたことになる。それとも走って逃げるか――。いや、警察だったらもう逃げられないだろう。

意を決して振り返った信治は、そこに思いもしなかった人物を見た。

「西尾さん……」

二週間ぶりだというのに、西尾は驚いていた。生気のない顔に薄笑いを浮かべている。

「声を掛けようかどうしようか迷ったんですが……金を貸してくれませんか？」

「金？」

会って挨拶もなしに、いきなり借金の申し込み――信治は面食らった。

「金があるんですよ……」と恥ずかしそうに、情けない声で西尾が言う。

金を貸すのはやぶさかでなかった。十万くらいは財布に入っている。だが、西尾の様子から察すると、それくらいでは済まない気がした。

信治は西尾を近くの喫茶店に誘った。西尾が辺りを窺いながら後についてくる。事務所が近い。裏切った黒津が現れやしないかと怯えているようだ。喫茶店に入ると、西尾が急ぎ足で先を歩き、奥の空いている席を目指した。そこはちょうど外からは見えない位置だった。

コーヒーをふたつ注文し、信治は俯きがちな西尾に話を切り出した。

「突然いなくなったから、どうしたんだろうって思っていましたよ」

「いろいろ事情があって……」と、西尾が照れ隠しの笑みを浮かべる。

「社長も心配していましたよ。いや、ちょっと怒ってたかな。でも赦してくれますよ、いつでも戻ってこられるようにしてくれていますから。戻ってきたらどうです？」

「もう戻れませんよ」

「どうしてですか？ 社長と何かあったんですか？」

「あったといえばあったのかもしれませんが……」

西尾の歯切れは悪かった。

「社長のことが嫌いになったんですか？」

梶山の言葉を思い出し、信治は訊いてみた。

「嫌いになれば苦労はしませんよ」

違ったようだ。

「それじゃ仕事？」

「そうですね、仕事は厭でしたね。安川さんだって好きこのんでやってる訳じゃないでしょう、いつ捕まるか分かったもんじゃない……。ですが、仕事そのものが理由じゃないんです」

「それは？」

信治が先を促すと、西尾は間をあげた。

コーヒーをゆっくり啜る。

「俺が社長の甥っ子なのは知ってるでしょ？」

信治は小さく頷いた。

「俺の両親は離婚していて……母さんが死んで、ひとりぼっちになった俺を社長が引き取ってくれたんです。高校生でした。だから感謝しているし、好きだった。役立たずの俺だけど、何とか恩返しをしたかった。でなきゃあんな仕事、続けられませんよ。罪の意識を感じながらもやってきたんです。だけど……もう駄目だった。耐えられなくなったんです」

「社長のことを好きだった……過去形ですね？」

その辺りに西尾の失踪の要因があると思い、信治は訊いてみた。

「そう、この前までは。母の命日に何年かぶりで親父と電話で話をしたんですけど、俺が社長の世話になっていると言ったら親父は急に怒り出しましてね。もちろん仕事の話はしなかったんですが、親父には俺が何をやっているのか分かったようです。ずいぶん前、俺がまだ幼かった頃のことですが、社長は義理の兄である俺の親父から金を騙し取ったことがあるんですよ。そのせいで親父は破滅。画に描いたような転落人生が始まり、そして離婚。社長が俺の両親の離婚原因だったんですよ。離婚の真相を初めて聞いて、俺は愕然としました。変だとは思ってたんです、実の弟だというのに、母は叔父さんを避けていましたからね」

「ずいぶん酷いことをしていたんですね、社長は」と、信治は眉根を寄せた。

「社長は昔からそうだったらしいですよ。親や親戚の人を騙してはギャンブルに金を注ぎ込んで……。騙すこと自体を愉しんでいたのかもしれませんが。だけど俺……社長のこと、嫌いじゃないし、嫌いになれなかった。子供の頃、俺にとってヒーローだったんですよ、叔父さんは。強そうで優しそうで……滅多に来てくれなかったけど、来ればオモチャをプレゼントしてくれて……母さんは厭な顔をしてましたけどね。だから、叔父さんが引き取ってくれるって言ってくれたときは嬉しかったんです。あんな仕事をしていると知ったときはさすがに驚きましたが……。

でも、叔父さんのために何かしたかった。恩義を感じていたし、役に立ちたかった。そして親父から真相を聞かされたんです。社長がやったことは酷いことです。母さんが早く死んだのだから社長のせいだと言えなくもないんです、貧乏でろくな治療が受けられませんでしたからね。だけど、それでも社長を憎めなかった。親父はずっと憎んでましたけど、俺は憎めなかった。世話になったからというんじゃないで、何というか……可哀想だと思うんですよ、人を騙すことでしか生きていけないなんて。そんな人生を社長はずっと送ってきたんです。つまらない人生、侘びしくて空虚な人生。そんな人生を送りたくないんですよ。反面教師といいますか、だから社長の元を離れることにしたんです。社長のような人を騙すことに麻痺した人間になる前に……手遅れになる前に。梶山は社長と同じタイプですね。あいつは社長に心酔しているようだし。安川さんはどうなんです？ やってて楽しいですか？」

「俺は……嬉しいなんて思ったことはありませんよ」

本当にそうだろうか。一度も、一瞬もなかっただろうか。

「まだ見込みがあるようですね。安川さんも正気なうちに足を洗った方がいいですよ」

そんなことは分かっている。誰も好きこのんでやってはいない。向いていそうだとは思ったが、仕事がなく金がなく、他に何をやったらいいのか分からないからやっているだけだ。

「西尾さんはこれからどうするんです？ 金を貸して欲しいとか言ってましたけど」

信治は話を本題に戻した。偉そうに訓示を垂れる西尾がちょっと癪だった。

「そうそう、肝心の話がまだでしたね。俺は親父のところへ行くことに決めました。と言っても、近所に住むんですけどね。親父は再婚してまして、こんなでかい息子と毎日顔を合わせるの、新しいお母さんも厭でしょうから……。

それで近くにアパートでも借りて、と思っているんですが、敷金とか礼金とかいろいろ掛かるでしょう。少しでいいんです、お金を都合してくれませんか？　すぐに返すのは無理だけど、来月から少しずつ返しますから、ねっ、お願いしますよ」

媚びた笑みを浮かべて西尾が言う。

「具体的にはいくらいるんです？」

西尾は指を三本出した。

「三十万……手元には十万くらいしかありませんが、明日まで待ってもらえれば……」

「それなら十万でいいですよ、面倒でしょうから。あとは何とかします」

「別に面倒ではありませんが……」

信治が財布から抜き取った十万を差し出すと、西尾は有り難そうに受け取った。

「何か書くもの持ってますか？」

「ボールペンならありますが、何に使うんです？」

「決まっているじゃありませんか、借用書ですよ」

「そんなもの要りませんよ、信用してますから」

そうは言いつつ、信治は西尾を信用しているわけではなかった。借用書を書いたところで金は戻ってこないと踏んでいる。西尾から何度も会いたくないという雰囲気醸し出されている。

社長が義兄である西尾の父親を騙したというのは本当だろう。それが原因で両親が離婚したというのも本当だろう。しかし、父親の家の近くに引っ越すという話は嘘っぽかった。

「そうですか……悪いですね。きっと返しますから。それじゃこれで失礼します。親父に連絡しないといけませんから」

西尾は金を手に入ると、そそくさと喫茶店を出て行った。

騙された——と、信治は確信した。

西尾は新しい携帯の番号も住所も教えなかった。向こうから連絡してくるのかもしれないが、おそらくそれはないだろう。これまで西尾から電話が来たことは一度もない。

悔しくはなかった。十万円が惜しくないと言えば嘘になる。それでも社長から独立した西尾への餞別だと思ふことにした。

信治は西尾が単純に羨ましかった。今の信治に、社長の黒から離れる勇気はない。そして西尾を軽蔑した。あれだけ社長の騙し人生を批判しておきながら、自分も未だにやめられないでいる。

仕事に取りかかる。

事務所には梶山とふたりきりで、黒津はいなかった。西尾に代わって銀行へ行くことになっている。今頃はパチンコでもやっていることだろう。昨日の奇妙な電話を思い出しながら、置きっぱなしになっていたリストに目をやる。

母親、島本静子、五十八歳。

全くの、赤の他人のはずなのによく似た声だった。喋り方もそっくりで、思わず「オレオレ...信治」と呼び掛けそうになった。それに、少しも疑っていなかった。向こうの声が母親にそっくりだったように、こっちの声も息子にそっくりだったのだろうか。そんな偶然が——

「ぼんやりしていないで始めるぞ」

梶山の声がして、信治は慌ててリストをめくり、次の名前に目をやった。

田沢和宏、十八歳。

親の名前はない。三年前の高校の卒業名簿だから、今年二十一歳のはずだ。自分との年齢差を気にしつつ、信治はリストの番号に電話を掛けた。

呼び出し音が鳴る。——が、なかなか出ない。

留守のようだ。買い物だろうか。それとも仕事に出ているのだろうか。切ろうとしたとき、ガチャリと受話器を取る音がした。洗濯でもしていたようだ。

だが、向こうから、もしもし、と呼び掛ける声はなかった。黙り込んだままで、通じているのかどうか不安になる。

「オレオレ……和宏」と、信治は相手の存在を確かめるように言った。

「お前から電話してくるなんて珍しいね、どうかしたのかい？」

通じていた。そして、どうやら声を疑われてはいないようだ。

「事故？ ああ、大変」

電話の向こうの声が狼狽している。

——さてよ。この声、この言い方、昨日の電話と同じじゃないか。

「事故処理に示談金が必要なんだ……」

「示談金だね。いくら必要なんだい……信治」

信治——信治と言った。こっちは和宏と名乗ったのに、電話の声は信治と——

昨日と全く同じことが繰り返され、あろうことか、電話の相手は自分の名を呼んだ——。

「……弁護士さんに代わるよ」

呆然として、信治は電話を梶山に渡した。

梶山がそれらしい真顔を作って電話を受け取る。

「もしもし……もしもし」

相手は電話に出なかったようだ。これも昨日と同じ――。

「くそっ。昨日といい、今日といい、どうなってるんだ？」

答えを求めると、梶山が信治に目を向ける。

「故障でもしたんでしょう」

信治は携帯の発信履歴を調べた。リストの番号と同じで、やはり実家には電話していなかった。携帯が混線することはないだろうし、それが偶然実家に繋がるなんて考えられない。やはり似ていただけた。だが――自分の名前をどうして知っていたのだろう。

「故障か……。妙な故障だ、俺が出ると話が出来ないなんて。他の携帯を使おう」

梶山が近くにあった携帯を渡そうとする。が、信治は受け取らなかった。

「どうかしたのか？ 顔色が悪いぞ」

「ちょっと具合が……。今日はやめませんか？」

「しょうがないな……。このところ稼いでないが、まあ、たまにはいいか。じゃあ、社長に報告してくる」

そう言うと、何故だか嬉しそうに梶山は事務所を出て行った。社長と並んでパチンコを打つつもりだろう。何処までも金魚の糞に徹する奴だ。

事務所を出て駅前に向かう。信治の頭の中は奇妙な電話のことでいっぱいだった。

母親とそっくりな声をした別人、あるいは母親に電話していた、どちらかだろうがどちらもほとんど可能性はない。そのふたつの他に、もう一つの可能性が信治の脳裏に浮かんでいた。

幻聴。

あれは幻聴で、初めから誰も電話に出ていなかったのかもしれない。罪悪感が母の声を聞かせたのだろう。だから自分の名前が出てきた——そんな気がする。しかし、誰も出なかったというのも妙だ。電話は通じていた。梶山が出た際も通話中だった。幻聴だったにしても、梶山の電話には誰かしら出てもいいはずだ。それとも電話の相手は梶山だから出なかったのだろうか。

アパートに帰り、信治は寝ころんで漫然と天井を見ていた。昨日と今日の奇妙な電話が頭から離れない。

母親そっくりの声、そっくりの口調——自分の耳がおかしくなったのだろうか。頭がおかしくなったのだろうか。

携帯が鳴った。

テーブルに手を伸ばして取ると、実家からだった。

母親だろう。信治は、母親が示談金の話の続きをするために掛けてきたのではないかと一瞬思った。すぐにそんなはずはないと打ち消す。

電話の声は若く、母からではなかった。妹の幸恵だった。久しぶりに聞いた幸恵の声は沈んでいた。厭な予感がする。

「どうしたんだ？ 幸恵」

幸恵の涙を啜る音が聞こえる。

「お兄ちゃん、お母さんが……倒れたの」

「倒れた？」

思ってもみなかった幸恵の言葉に、信治は頭の中が真っ白になった。

「昨日のお昼過ぎ、牛の世話をしている……」

「容態はどうなんだ？ 重いのか？」

つつい焦って口が早くなる。

「命に別状はないって。意識不明の状態が続いてたんだけど、今日のお昼前には戻ったわ」

「よかった……」

信治は心底安堵した。最悪の事態が頭を掠めただけに、喜びもひとしおだった。脱力で携帯を落としそうになる。

胸を撫で下ろしながらも、母親の意識不明の時間が気になった。昨日のお昼過ぎから今日の昼前にかけて——奇妙な電話の時間と一致する。

あれは本当にお袋と電話で話をしていたんじゃないだろうか。

意識がないまま、お袋は俺のことを心配して電話に出たんじゃないだろうか。

「本当によかったわ。単なる過労らしいの。心配するからお兄ちゃんには報せるなって言われてたんだけど……」

「こんなときくらい心配させてくれよ。今までさんざん心配を掛けてきたんだから」

「そうよね」と、幸恵が泣き笑う。

信治もつられて泣き笑いそうになる。心が軽くなる。

「俺は駄目な兄貴だった……」

「うん、そうね。いろいろと迷惑掛けて……」

悪戯っぽく幸恵が言う。もう泣いていない。

「大学へ行かせてやるって言ったけど、出来なかった」

「そうだったね。ちょっとだけ期待してたけど」

「俺のせいで幸恵は恋人も作れなかった」

「それはお兄ちゃんのせいじゃないけど……」と、恥ずかしそうに幸恵が言う。

「なあ、幸恵」

「何？」

「駄目な兄貴でも帰っていいかな？」

「何を遠慮してるの、いいに決まってるじゃない」

「お袋たちは俺を赦してくれるかな？」

「赦すだなんて大袈裟ね、親子じゃない。それで、いつ帰ってくるの？」

「明日」

「明日？ そんな急に大丈夫なの？ 印刷会社は休めるの？」

幸恵は失業中なのを知らないようだ。

「大丈夫だ、ちょっと帰るだけだから」

「本当ね？」

「ああ、もう嘘は吐かない。やっと自分がどうしたらいいのか分かったんだ。何をすべきなのか、どう生きていけばいいのか……やっと分かったんだ」

「難しいことを言うのね。お兄ちゃんらしくないわよ」

「……らしくないか。そうだな」

「それじゃ明日、空港へ迎えに行くわ」

携帯電話を切る。

嘘を吐くことだけで家族と繋がっていたのではなかった——そのことを信治は嘔みしめた。

次の朝、信治はアパートを引き払った。急な話で大家は怒ったが、封筒に入れた迷惑料を渡すと、家財道具の処分もしてくれることになった。

一日分の着替えを入れた小さな鞆を持って羽田空港へ向かう。携帯の電源は切っている。

モノレールの窓から十年を過ごした東京の街を眺める。いくつもの新しいビルが建っていて、拡張された埋め立て地はまるっきり違う景色だった。水辺の光が眩しい。

空港に着くと、搭乗口は混み始めていた。もうすぐ新千歳空港行きの搭乗時間になる。信治はゆっくりと搭乗口に向かった。長い通路を進み、待合いロビーの椅子に腰を下ろす。外の景色を眺めると、窓の向こうには青く晴れ渡った空が広がっていた。ところどころに白い雲が浮かんでいる。

涙が溢れた。

塀に囲まれた空ではなく、限りなく広い空がみられるのはあと何年後だろう。これまでの親不孝を償うために、最後の親不孝をしなければならない。

スタンバイしている新千歳空港行きの飛行機が涙で歪んで見えた。目にする光景の何もかもが歪んでいた。

涙を拭き、信治は搭乗のアナウンスが流れるのを静かに待った。

全てを打ち明け、明日はまた東京へ戻る。戻って——出頭する。

梅雨のない空は薄い雲がかかっているものの、よく晴れていた。遠くの山々の稜線がくっきりと見える。

辺りには刈り取ったばかりの牧草のにおいが漂っている。

トラクターの運転にはようやく慣れてきたが、日々の生活にはまだ慣れないことの方が多い。牛も未だに怖い。しかしそれも時期に慣れるだろう。

そろそろお昼にしよう、と呼び掛ける声が聞こえ、信治はトラクターを降りた。腰を伸ばし、首に掛けたタオルで汗を拭く。大地を踏みしめ、我が家へゆっくり歩いていると、道の向こうに、近づいてくる一台の車が見えた。

車はやがて信治の前で停まり、助手席から幸恵が降りてきた。

「ちょっと早く来ちゃった」と、はにかみながら言う。

運転席から紺のジャケットを着た男性が降りてきた。高校野球の選手だったらしいが、それが頷けるほど逞しい体躯をしている。

「初めまして。奥田と申します」

緊張して挨拶する男性に、信治もぎこちない笑みを返した。

後ろから父と母が呼び掛ける。

「突っ立ってないで、早く」

「早く家にお入り」

嬉しそうに手を振り、信治たちを急かせる。

見知らぬ訪問者を歓迎しているのか、牛たちが空に向かって一斉に鳴き声を上げた。

それは遠くの山々にまで届いた。

了